

沖縄県うるま市津堅島における 文化的景観調査

島本 多敬

はじめに

京都府立大学と同大学院の連携授業の一環で合同調査として、沖縄県うるま市の津堅島にて文化的景観調査をおこなった。本章はその報告である。

1. 調査概要

調査日：2016年（平成28）6月21～24日

調査地：うるま市勝連津堅（津堅島）

調査者：喜馬佳也乃（歴史学科4回生）

加藤叡（文学研究科研究生）

島本多敬（文学研究科博士後期課程2回生）

2. 調査結果

文献調査と現地での踏査・聞き取りから、下記の特徴をもつ文化的景観を確認できた。

津堅島は中城湾の東の外縁に位置する低平な島である。この地には、島の大半を占める琉球石灰岩の平地、外縁部の植生、泥岩層からなる比較的低い丘陵地、島の周囲の礁池・外海を利用した生活・生業が展開した。

平地は畑とされ、琉球石灰岩由来の水はけの良い赤土（島尻マーヅ）を利用して作物が育てられた。主食のサツマイモのほか、戦前は津堅ダイコン、戦後は米軍向け野菜、のち津堅ニンジンとを換金作物として生産し現在に至っている。

島外縁の防風・防潮林は畑への潮風の影響を防ぐほか、かつては丘陵地の植生とともに燃料・肥料・日用品素材として利用され、島の生活・生業を支えた。泥岩層からなる丘陵地にはカー（井泉）が点在し、河川を欠き天水に頼ってきた島の貴重な用水源となって、集落の位置を規定した。丘陵頂部付近は信仰・顕彰の場となっている。

礁池や外海での漁業は現金収入をもたらす重要な生業であった。かつては海藻・ウニの殻が肥料に利用された。現在はモズク養殖が最も盛んで、礁池がその生産の場に使われている。

赤（島尻マーヅ土壌の平地）・緑（防風・防潮林／丘陵地）・青（外海／イノー）の各色で示すことのできる圏構造の景観をもつ低平な島で、人々は地形・地質条件を利用しながら生活環境を確保し、半農半漁により生計を立ててきた。生活条件は変化したが生業の大きな枠組みは継続しており、それを支えてきた圏構造の景観は現在も残されていた。

3. 成果報告

以上の調査成果は、奈良文化財研究所景観研究室が主催する、第8回文化的景観研究集会におけるポスター発表にて公表した（下図）。ポスタータイトルは「赤と緑と青のシマー沖縄県うるま市津堅島」である。当日は集会参加者への説明に対して質疑が交わされ、離島の生活を示す景観への関心の高さを感じることができた。

【謝辞】

調査に際し、津堅区長様をはじめ住民のみなさま、うるま市海の文化資料館の前田一舟様のご協力を賜りました。末尾ながら記して御礼申し上げます。

赤と緑と青のシマ

—沖縄県うるま市津堅島—

日本学術振興会特別研究員（DC）
 京都府立大学大学院文学研究科博士後期課程 島本 多敬
 京都府立大学文学部歴史学科研究生 加藤 毅 / 同 4 回生 喜馬 佳也乃

1. 津堅島の立地・地形・地質

- ・沖縄本島から東へ約 14km、勝連半島から南南東へ約 3.8km 離れた場所に位置。
- ・面積 1.88 ㎢。島の東西約 0.8 ～ 1.3km、南北約 2.3km。
- ・島の大部分は琉球石灰岩の平地、島の南西隅は泥岩層の低平な丘陵地をなす。
- ・島の周囲を北東から南にかけてサンゴ礁が囲み、内側にイノー（礁池）を形成。
- ・戦前は勝連半島の屋敷名（勝連村（町）、現うるま市）や本島の与那原（大里村、現与那原町）へサバニ（小舟）で渡った。戦後は半敷屋港（勝連村（町）、現うるま市）との間をフェリーや漁船が通行する。

地形・地質の断面模式図

昭和 59 年測量・同 60 年刊行海上保安庁 5 万分 1 海成地形図「中城湾」に加筆（伊勢島周辺のサンゴ礁を黄色で塗りこり）

2. 津堅島の景観

・防風・防濶林
海岸線をアダン・オオハマボクなどの草木が囲む。かつて落葉は燃料として使用され、アダンの気根は帽子やモッコに、木の幹は下駄の素材となった。

・島尻マーヅの畑
琉球石灰岩由来の赤土では水はけが良い。戦前はダイコン、戦後は米軍向けに蔬菜、のちニンジンを換金作物として生産してきた。また、イモ（サツマイモ）も戦前から栽培されてきた。

・国森御嶽と水道タンク
集落で最も標高が高い地点に、国森御嶽と 1975 年（昭和 50）に関連した海底水道のタンクが設立している。

・耕地とミーガー
平地は 1975 ～ 81 年の土地改良事業で圃場整備と農業用施設設置がなされた。道路左脇（写真左側）の改みには 1900 年（明治 33）開削の「ミーガー」があり、戦後、開削水道の水源とされた。

・アザ浜
1982 年に近代的な漁港が整備された。浜の周囲にあるイノー（礁池）は、良い漁場で、今もアイゴやタコが獲れる。また、外海ではイカが獲れる。

・カー
水道開通以前、島の水源は雨水とカー（井筒）であった。写真のアラカーは、産水や死者の身体を清めることにも使用された。

・漁港に干されたモスクの網
水網のなかで育てた魚は、島の東部の木ばた（遊樂場所）へ移して生長させる。4 ～ 5 月頃に収穫する。

・シャコ貝
島および勝連半島近辺では、シーサーや石敢壇のほかに、家屋の門や角に魔除けとしてシャコ貝を置く。ケモ貝なども置かれる。

・モスクの育苗タンク
1980 年代からモスク育苗がおこなわれている。8 ～ 9 月頃に島の北側の海で種付けし、10 ～ 11 月頃写真の青い水網に移して育苗する。

・セナ八浜
半敷屋港との間を往復するフェリーのターミナルがある。旅客のほか、島で使用する燃料なども運んでいる。

3. 1903 年（明治 36）における土地利用

「明治 36 年の地籍図（1）～（4）」（沖縄県教育庁文化課編 1977 所収）をもとに作製。1975 ～ 81 年の大規模な土地改良事業以後と比べても、土地利用とその配置に大きな変化はみられない。

4. まとめー津堅島のく地域らしさー

赤（島尻マーヅ土壌）・緑（防風・防濶林／丘陵地）・青（外海／イノー）の圏構造をなす低平な島で、人々は地形・地質条件を利用しながら生活環境を確保し半農半漁によって生計を立ててきた。生活・生業条件の改変が進んでも、**生業の大きな枠組みは現在も継続しており、それを支えてきた圏構造の景観は現在も残されている。**

謝辞
津堅区長玉城啓輝様はじめ津堅島の皆様には、現地での調査・聞き取りに際してお世話になりました。また、うるま市教育委員会の前田一舟様には、調査ならびに参考資料に際して貴重なご教示を賜りました。なお、現地調査においては京都府立大学文学部藤本仁文准教授に補助していただきました。記して厚く御礼申し上げます。

参考文献
琉球大学民俗学クラブ編『民俗』3、琉球大学民俗クラブ、1961 年
 沖縄県教育庁文化課編『津堅島地誌調査報告書』沖縄県教育委員会、1977 年
 比嘉繁三郎『津堅島の記録』私家版、1990 年
 沖縄国際大学民俗学研究所編『津堅島調査報告』沖縄国際大学民俗学クラブ、1993 年
 琉球大学文学部人間科学科民俗学研究室編『シマ』7、琉球大学文学部人間科学科民俗学研究室、2005 年
 (財) 沖縄県文化振興会編『沖縄県史図鑑 県土のすがた』沖縄県教育委員会、2006 年

図 ポスター『赤と緑と青のシマー沖縄県うるま市津堅島』